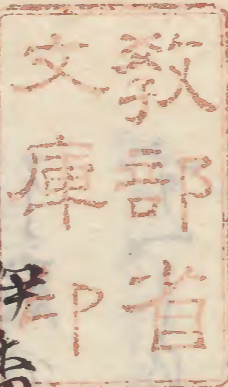






近江國輿地志畧卷之八十八

内一〇二六七號



伊香郡第一



長清 編輯

史記傳書の巻名に  
載せられたる古伝傳る説

おろしき古伝相傳天智天皇の御宇 湖本



天長下りて遊跡舞樂其甚致及乃其見多し

其教五音形りかろゆへに五音の兒一書一々

いふと讀しつゝ然も五音の字よりつゝの訓



形一若この設実形もその字の思を書していつと  
訓すもあつてその字の思をいつの訓あるといふ  
のつらうかす<sup>一</sup>向実録及保氏物語もあつた  
出づる果竟愛中より 愛城歌より能合もあつた  
の字の思をいつの訓ありとも 天人游詠奇歌の思も  
了那乃名とするといふなり 形もいつの訓ありとも  
すつた一説は曰維古志の地より 果木阿もあつた  
花ひくくもあつた異名四方不意すかもあつた

異香郡といふ後より伊香の字もあつたといふ  
をともする所なり形もあつた伊香は古余而願  
の地形もあつた名もあつた伊香具神社あり  
同じ歌名もあつた延喜式に神名帳にも伊香具の  
社にも<sup>一</sup>延載の書なり<sup>一</sup>伊香具と書くとも  
いふとも訓も<sup>一</sup>伊香具と書くとも伊香具と書くとも  
伊香具と書くとも伊香具と書くとも伊香具と書くとも  
伊香具と書くとも伊香具と書くとも伊香具と書くとも











多上村乃近ありて吉川とて八幡宮ありて  
とありていふあり

○唐川村 森村のありあり

○観音堂 唐川村ありて聖徳太子の長子と

号は正徳山の末子とていふありて観音  
堂とありていふあり

○馬<sup>うま</sup>上村 唐川村の東ありあり

○渡岸寺村 唐川村のありあり

○寺跡 渡岸寺村ありて何れ渡岸寺のありあり

○観音堂 渡岸寺村ありて森山光眼寺

と号す出俗相傳この観音祀禮成守りたまふの  
誓ありていふありて寺堂す古き也山繁昌のと

記に堂舎ありて寺院なりとあり

○天満毛神社 日村森の内ありて菅原の孫

あり菅原白<sup>自</sup>造りたまふとありていふあり

○  
ありていふあり



○栢原村

渡岸寺村の北東にあり

○西森村

栢原村の北東にあり

○西森寺

西森村にあり

○保延寺村

西森村の北にあり

○持守村

保延寺村の北東にあり

○美師寺

持守村にあり

○白山権現社

同村にあり

○井口村

持守村の西にあり

○天神社

井口村にあり

○理髪院

同村にあり

○提新

同村にあり

○井口

同村にあり

○や

同村にあり

○海

同村にあり

山と修了

○



○尾山村

持守村の在りあり

○井原神社

尾山村ありあり 大井と云井水の

よりありお侍より井原正娘井水引兼る人  
に  
入りしとあるに記ありと云ふ

○安ふと大石

旧村ありありお侍より古言を他

重なりと今終りより大石をりあり記書に云ふ

尾原のとき後より尾原昌七と云記ありと云ふ

○山の縁地より云々あり

○洞戸村

尾山村のありあり

○右道村

洞戸村の東にあり

○右道寺

右道村ありお侍ありと云ふ

己言山右道寺と号し延法上人の園基傳大

師の再長ありいま一山了二寺あり寺の付お

り華曼八流旗守に流ありと云ふなり持守寺

中石道寺の縁地ありと云ふなり

中石道寺の縁地ありと云ふなり



勸緣汝門光澄敬白

欲令時蒙十方檀那助成修造

江列伊香郡已高山石道寺堂

舍破壞狀

竊以當寺者延法上人之開闢

傳教大師之再興也災草創之

後延曆之比大師攀已高高嶺

建石道道場為天台之別院以

摸睿岳之風範為桓武之御

願以呈獻信之懇篤從爾已降

顯教密教之練行薰修年日遮

那止觀之學業鑽仰日新一宗

之阿彌陀堂者根本之建立五

間之觀世音堂者中興之梵場

也彼崇樂邦淨刹之教生此安

苦畏濁世之能化二聖之本願



淨穢雖異二利之大道凡聖與  
 差又大師自第<sup>第</sup>十大之巖石忽  
 湧<sup>二</sup>一泓之灵水保是穿鑿於高  
 原之相顯<sup>二</sup>已高山決定知迤<sup>二</sup>水  
 之理亦石道寺者乎爰夫佛閣  
 延文回祿<sup>應</sup>忘安再造後久無<sup>二</sup>修  
 神之造營<sup>二</sup>因茲棟梁頽毀而礎  
 石埋<sup>二</sup>青苔簷扉零落而椽<sup>二</sup>栝  
 白<sup>露</sup>而<sup>荒</sup>籬<sup>籬</sup>之露催歎泣深洞之  
 風含悲声<sup>二</sup>千時小僧先澄頃年  
 居住<sup>二</sup>当山今<sup>應</sup>廢壞之節<sup>元</sup>爭<sup>二</sup>無<sup>二</sup>  
 惘歎之思乎寢<sup>寢</sup>食嗟而有餘造<sup>造</sup>  
 次思而無益不如<sup>早</sup>上<sup>達</sup>天聽  
 下<sup>誘</sup>誇<sup>二</sup>萬戶<sup>二</sup>勵<sup>二</sup>修造<sup>二</sup>之大堂肆<sup>二</sup>聊  
 述<sup>二</sup>微志<sup>二</sup>於魯愚之勸流<sup>二</sup>欲<sup>二</sup>成<sup>二</sup>大  
 願<sup>二</sup>於貴賤之助力<sup>二</sup>七<sup>二</sup>珍<sup>二</sup>之財<sup>二</sup>一







○在物部村 渡岸寺村の西あり村あり

○鏡音寺 在物部村あり

○在物部村 東物部村の西あり

○横山村 西物部村の北ありあり

○横山古明神社 横山村あり一対の善徳古神

○たり延喜式神名恒り新瑞横山の神社を

○唐川村 横山村の西ありあり

○涌出山 ゆりだしやま 唐川村ありあま あま 唐川山なり他

○此立一所すくかり古伝おほふ一あり涌出を

○山なりとしふ田の中は六の山あるといふ好事の

○者この取を改りて人この山なり云々案と

○一箇の月三三度実のふありといふ事あり

○在物部村の地を云々云々の事あり

○鏡音寺 唐川村あり涌出山の地あり

○養法院 同村あり禪宗兼並洞部院の事

○たり洞部院二世志岩室禪師開闢の地あり



○ 越馬寺 同村にあり 浄土真宗あり

長壽寺 下つら

○ 熊野村 東阿岡村のありありて 餘瀨川を

隔て 西にあり 村なり

○ 西野村 熊野村のありありて 村なり

○ 松尾村 西野村のありありて ありて ありて あり

○ 御新御社 ニミヤウニヤン 松尾村にあり 歳早にあり

ありてのありて ありて ありて ありて ありて

○ 片山村 熊野村のありありて ありて あり

○ 新庄 富永庄のありありて ありて あり

○ 西柳野村 西柳野村のありありて 餘瀨川のあり

ありて ありて ありて ありて ありて

○ 柳野村 西柳野村のありありて 餘瀨川の

東岸にあり ありて ありて ありて ありて

○ 常塚 柳野中村にあり ありて 古言大音社の

ありて ありて ありて ありて ありて ありて



堂り子と後を 惣塚と云ふありなり 大言  
ありこの地一里あり

○東極寺村 柳中村のありあり

○西阿岡村 阿岡 柳中村の南にあり

○磯中村 柳中村乃水ありありあり

○金尾寺 磯中村ありあり 菅葉流あり

○赤水三社明神社 同村ありあり

○観音堂 日村ありあり

○磯野山 一町ありあり 古井伝ありあり

磯野丹波古塚のありあり

○三田村 磯中村のありあり

○布施村 三田村の西ありあり 布施村のあり

坂田郡の惣下り記

○奈茂村 布施村の西ありあり 沼川ありあり

ありありあり 沼川ありあり 沼川の三條あり

ありありあり 沼川ありあり 沼川の三條あり



地あり

○西極寺 高尾村よりありお侍古昔此地に

安守寺 新泉寺より 二程あり 小若山 高尾

の後はとま<sup>せ</sup>く<sup>せ</sup>後寺より一向宗の僧徒より一

寺と建ちし 高尾寺と号する村意一向宗

高尾湯作

高尾村

○中庄

○西山村

高尾村の北ありあり

○一系寺

西山村よりあり 禪宗なり

○大音村

西山村の北ありあり

大音村の神社

大音村よりあり 張記より

作高社の本社と号する 高尾の山中を經る

またハミ社十代の初國常立の第<sup>初</sup>をいふ 街中

ミ社と号するこの社十代の孫をいふ 高尾<sup>根</sup>場

高尾を根を根を云代の孫をいふ 高尾津長今と



いふ即ち道南社の以神なり地孫五代の祖の  
を思ふ神その石室に入りて福徳神戸を因  
おたふし時以人を根命等その祈禱を致し  
大津野戸と云ふま別命等福徳出の繩を昇  
りていふ一語して曰く勿まじ儀還幸し其とこれ其  
なまを申長藤系の子をささる源宗なり  
ふしうこのふ代におまの述説をなして今  
とて執拗を承門とぬる由は實に之

伊多付臣命あり法座し一まてふ上世  
新我流あり田里の興に致し何れを  
いん但一法神の遊戯をさるあり伊多付臣命  
子孫を考て曰く是は以を根の事と傳てて思  
を孫傳授して久し宝意と護る為これ地  
少く苗よ末代と護る一し即ち而後伊多  
流なく其神の流なり又人を軍代を武を  
石鳳十の辛巳代と伊多伊多宿禰宿禰を改め



ゆめを別ニ此地に於て是より永く為す氏と  
別ニ一寺に弘法大師法別り 福應して其  
其年の區カキとして記すことありしに  
神をあるとて 知つて魂を勤念するに  
或本如月の晴湖なるふ ありて一女忽ち現して  
社名の湖時より 是より大師降し 三つに答へら  
く吾をよき 是地の子なり 上人偶々身  
法施すは 修るべき 幸福なり 然るに上人

この江隈と決りて 漏漚を却よ けりし 吾の女  
神と知人と云已月て 去るんと 歎き 大師後回す  
神いつきの ありて 是より 此派の 龍陽の 尖り  
るを 即ち 是族の 嶽ありと 曰て 去る 後其の  
此大師 神勅に 依りて 山陰を 經りて 泊るを 洞  
を 温派の中 於て 爲推求 其別果して 地を  
産産の 其像と して 崇奉 人々 必 後 神 派  
の 其 像 なる こと 實に 其 知 悉り 其 事 なる 事 其 社



と建て神仏と云う蒙教は又人皇万代  
を多天と宣平七年乙卯菅家の奏進に依  
て當社と封免しと殿信も多々ありし者お  
ろろ法華經念光明經と云う宣平七年乙卯  
む取<sup>即</sup>ち初教と云う曰く正一位認つて大社の  
大原神合別是即菅家と又昌泰二己未の自  
四月二十日と云う多れと云ふ切戸多々あり  
と云ふ教度の多々ありと云う悉く<sup>奉</sup>たす

めんつと三百年中禁回指家相承者其國我  
の日社も多々ありと云う社記爲りし者  
多れは甲子二十日辰四月十日を記して  
多々ありし者四月十日を記して  
中長按多々社記と云う其の強<sup>ん</sup>廣おまし  
つとて採用しと云う社記と云う多々の  
社記は伊香津長命なり定者式社名は伊香  
那伊香具の社とありこの社なりと代官



浪西曰貞觀之年正月二十七日甲申投逆江  
後五位上藤原等伊弉孫尾四位下長能八通  
三月七日壬子投逆江尾鏡四位下藤原等伊弉孫  
後四位上云々

○天正寺 大音村にあり

○長久庵 同村にあり

近江國輿地志異卷之八十九

長 峯川 辰清 編輯

伊香郡 第一

○黒田村

大音村の東にあたりてあり  
あり奈洲川の東あり

○古沼般若堂

黒田村にあり 般若寺  
と号す 黒田村の月穂先若と只子妙あり

今人家にあり



○徳先毛者巻

記多事にてあり 古伝

相傳之弘三子 彌倉六波羅没落此を  
依て本恩向判官此地にのれきたりて豪  
富となり徳先長者と子別馬向判官の  
養なりと子貝原篤信翁と馬向此を組  
依て本恩向判官家流の在所ありと云々  
諸別巡の記に志る事きたり 法華姓名も  
忍つて不審馬向家流の養となりと云々

○千田村

馬向村の南にありては村あり

○本本村

馬向村北東にありては村あり

六月廿四日正月廿四日地元の縁日を  
あつて是張なり

○浄徳寺

本本村にありては和浄

本本地元の是なり 寺願ありて石地  
寺豊長秀頼公此再興あり 寺利公  
寺昭朝長と系流して小派治宗迄るなり



及鳥目等とて細きると載て實紀に  
あり縁記に曰江分許留那赤年の色  
長新山津伝と地蔵菩薩の尊像を  
南天竺新樹菩薩の彫刻ありと武蔵を  
の御寺掾波岡唯波唯波の波にたよひたまふ  
てふ家く海中に令色の光あり浦の羅氏  
甚く水をあらしむ其時にあつて帝夢中  
に地蔵菩薩の像とありたまふと尊像

考へ言く系佛の存属とて末其  
世に衆生とて度せんた現に六道に抄抄死し  
身は五量に變し三惡道道に入てい  
苦に成り三苦道にまてハ果報とて  
こまなるて空出たり淋林森の難波此  
浦にまるとまるとありたまふり帝おと御かせ  
海りくして法師との釈道法師初に初し  
難波一法とてむ道とて浦の浪人に尋ぬ



漢人著て曰以の海中に金色の光あり  
人とかををあやしそ祇道その光の光の光の  
有りたるぬに長く人有余地地蔵此等  
縁あり道わあひあはれそ縁を抱あぶる  
勝りて珍毛のこと一道進事に書籍を  
上表を帝その其理を感しそ難波に伽藍  
と名建し寺山に二号を下しなまに原公  
と稱しと出たり此地より出現すそ其書蹟

おのそを厚陽山と号しそくく金色の光  
ありおに金光寺と名付けをたそ月  
を名神をほら移りそりそ神もそやの如く  
おしそ集りそ教ありそゆるそ聖子の去  
三月下旬に祇道越の白山へ新詣り集  
道務の次富兵衛の入江の南にあたりそ忽  
そそ集りそ聖子そそそそそそそそそそ  
そそそ入江あり法成法としそそ



夕月後亦不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>也言山緑樹森<sup>レ</sup>として  
松風系折<sup>レ</sup>とむる在<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>呼<sup>レ</sup>吹<sup>レ</sup>大山不<sup>レ</sup>接<sup>レ</sup>  
たれ<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>陰<sup>レ</sup>岡<sup>レ</sup>陽<sup>レ</sup>岡<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>  
地<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>陸<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>旅<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>え  
豈<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>誠<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>瘡<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>世  
界<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>誓<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>佛  
法<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>疎<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>彼<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>世  
の<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>慕<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>絶<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>帝

一巻一末あり、三所余あり、二所の地を  
くま<sup>レ</sup>細<sup>レ</sup>盤<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>連<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>尾<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>尔<sup>レ</sup>磨<sup>レ</sup>て  
く<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>釘<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>夕<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>を  
伽<sup>レ</sup>藍<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>樹<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>柳<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>号<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>柳  
お<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>北<sup>レ</sup>岸<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>於  
此<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>岸<sup>レ</sup>諸<sup>レ</sup>寺<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>  
切<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>津<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と



ハ家雷神と申す所ある神ハ其去年に  
たまふ神あり和家考明神に何とてはなま  
冬夜明神ありて其に現るは神に  
て大音大明神とありしれ其勢なまよその後仁  
西平二代之帝源頼朝の御宇に於て  
自の月法古所は其をを遷し  
<sup>辨六</sup> <sup>和家</sup> 其をを遷し  
たまはく末曾其の果縁あり終之とも  
推移て果縁且<sup>換</sup>換せり其力と法く

修補せんにハ遂に其具したまひて大師自  
組紙を泥本移地縁一紙云々成写し  
其に自張の御縁等と云ふ殿に不<sup>元本如此</sup>あたまり  
あま其方師等みしと宝子の入江に毒  
柳て付し人と煩を汝が持せよと地縁  
現あり刻妙持の力ともつて毒縁を  
たまふそのまき毒縁七八歳と云ふを



一  
大所にはある大所のたまたまは汝に法をうけ  
きく所の人をきき女のしんくつにむふの山の  
ぬしありて人にとらるゝの夜山  
いして倉穀とてう波にまむと年ひさし君  
そとむと若くもと支那にあきとてう之をけ  
とてふらうし大所のまはくく水は佛法のま  
あんをぬぞ人とらるゝの夜とて拂なま  
きそのまは山とてうちて水波とてはのらうと

一  
ひまがうはめに平地とありたまふ蓋毒  
まむとをわかれとありその前とあり<sup>お</sup>り  
名はくるとはけりありき毒海にむふの  
山にまむとていしゆりまの山を賊り<sup>お</sup>り  
おのりい来人を六十代の帝冠とて  
御守昌泰二年上旬菅お公と初して  
のまはくはあ柳本山の地をきき  
まはくはあ柳本山の地をきき







とく

○河合村

本村の東山にある村あり

○大善村

河合村の西北にあり

○古橋村

河合村に南東馬上川の東に

古村の北にあり

○法花寺

古橋村にあり、河をわたり

奥の山にあり、寺中六つ、寺あり、古くは

石田沼に少捕、三成初、北にきき、石田との

寺の三珠院にあり、ゆゑにや、寺中六

三成り、寺あり、寺中六つ、寺あり、

使然山法花寺と号、法花寺、縁起に

曰く、皇三十九代、天智の七年、

若狭聖に、佛を、日域の

山勝地、とく、遊歴、勅、

感念と、<sup>應</sup>た、ま、り、こ、こ、を、つ、て、

名山、異地、堂、塔、と、し、く、

仏像と、安を、



聖主八代に直て八十餘年不家と漸  
後一宗生と利益一たまをてに人をして  
十<sup>五</sup>代聖武天皇此御宇天<sup>平</sup>元年南  
山にうつりて志ばらく<sup>勤</sup>初<sup>元</sup>してたらまら<sup>具</sup>  
感とわちよき事つら<sup>東</sup>方淨瑠璃世界系  
師如<sup>主</sup>の海宇と遠見を<sup>別</sup>七<sup>經</sup>のめ<sup>末</sup>  
と法<sup>一</sup>字の草庵とむ<sup>人</sup>して<sup>を</sup>安<sup>を</sup>  
其<sup>遠</sup>波如<sup>來</sup>祇<sup>像</sup>七<sup>經</sup>の<sup>中</sup>取<sup>不</sup>

何る<sup>二</sup>に<sup>一</sup>よ<sup>り</sup>て郡縣の酋長見おめ<sup>た</sup>は<sup>法</sup>  
茶<sup>教</sup>法<sup>卷</sup>食<sup>一</sup>して香<sup>苑</sup>を<sup>を</sup>之<sup>以</sup>て<sup>禮</sup>と<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>  
あ<sup>ふ</sup>ひ<sup>と</sup>り<sup>此</sup>沙<sup>門</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>弘<sup>基</sup>菩<sup>薩</sup>の<sup>の</sup>  
教<sup>誠</sup>と<sup>う</sup>く<sup>先</sup>と<sup>う</sup>法<sup>道</sup>に<sup>法</sup>苑<sup>總</sup>と<sup>支</sup>持<sup>一</sup>  
して<sup>他</sup>に<sup>行</sup>に<sup>ま</sup>り<sup>弘</sup>基<sup>菩</sup>薩<sup>の</sup>教<sup>示</sup>に<sup>に</sup>  
向<sup>う</sup>て<sup>を</sup>か<sup>く</sup>この<sup>前</sup>に<sup>行</sup>して<sup>醫</sup>王<sup>の</sup>を<sup>養</sup>と<sup>し</sup>  
信<sup>中</sup>寺<sup>を</sup>法<sup>苑</sup>寺<sup>と</sup>な<sup>は</sup>く<sup>一</sup>の<sup>謂</sup>初<sup>又</sup>人<sup>皇</sup>  
五<sup>十</sup>代<sup>桓</sup>天<sup>皇</sup>延<sup>暦</sup>年<sup>中</sup>傳<sup>ふ</sup>大<sup>師</sup>







鼻に宝珠和尙とありえより自  
秘密の教法とまじりて聖宝を師の風  
雅を志ふ非愛加持の志声感通不  
思儀の強者あり当山親領とかなる  
類に強補の志を願ふとてつて  
世間存福の養生ゆる不順にしてつて  
飢寒の患あり和尙同志のありこれなき  
中によりてふと山林に入て志すく後子伝

修して出家の妙<sup>薬</sup>をけつりてならまら<sup>早</sup>  
骨の痛をけし万<sup>葉</sup>を鏡にして日海恭平  
よりこまにりて家郡まきまひまて川で宗教  
斜あつたそのとき和尙勤て諸人をいざさ  
大願をこけ早ぬ和尙ひとり不思儀の力用  
あり河伯山神法を不使令とまき山川の  
源流を<sup>て</sup>思て至るまてつてあり

○戸羅池

法苑寺山の頂上北東南



有り方之所 とううをまはくぬき池ありおた  
てて豊濃城前の二圃にわがる古伝ありつふ  
尸羅と云ふ神祇此名あり新羅抄に云ふとありて  
この法苑寺代々の院 王<sup>注</sup>歳早<sup>注</sup>なると云ふ  
り多<sup>注</sup>は他<sup>注</sup>に在ると云ふ事ありと云ふこと  
あり西<sup>注</sup>被<sup>注</sup>拾<sup>注</sup>遺<sup>注</sup>曰<sup>注</sup>西<sup>注</sup>被<sup>注</sup>郡<sup>注</sup>のありひにあ八<sup>注</sup>郡  
と云ふありと云ふこと不安ハ<sup>注</sup>と云ふことありと云ふ  
富考の若あり如子二人ありあることありひふ

早して一歌甚固家<sup>注</sup>を有る日山<sup>注</sup>依一人<sup>注</sup>きたり  
て一人の女とあるは水とある人と云ふと云ふ  
と忽大<sup>注</sup>なる<sup>注</sup>水と云ふ<sup>注</sup>万<sup>注</sup>民<sup>注</sup>た<sup>注</sup>に<sup>注</sup>よ<sup>注</sup>る<sup>注</sup>こと  
山<sup>注</sup>依<sup>注</sup>其<sup>注</sup>女<sup>注</sup>と<sup>注</sup>は<sup>注</sup>書<sup>注</sup>を<sup>注</sup>見<sup>注</sup>ぬ<sup>注</sup>声<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>て<sup>注</sup>云<sup>注</sup>家  
徑<sup>注</sup>方<sup>注</sup>の<sup>注</sup>逢<sup>注</sup>水<sup>注</sup>に<sup>注</sup>あ<sup>注</sup>たり<sup>注</sup>て<sup>注</sup>山<sup>注</sup>上<sup>注</sup>の<sup>注</sup>池<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>紙  
二人<sup>注</sup>乃<sup>注</sup>不<sup>注</sup>あ<sup>注</sup>る<sup>注</sup>は<sup>注</sup>是<sup>注</sup>より<sup>注</sup>水<sup>注</sup>八<sup>注</sup>相<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>山<sup>注</sup>の<sup>注</sup>妻<sup>注</sup>ふ  
大<sup>注</sup>池<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>は<sup>注</sup>云<sup>注</sup>なる<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>大<sup>注</sup>蛇<sup>注</sup>なる<sup>注</sup>彼<sup>注</sup>池  
に<sup>注</sup>年<sup>注</sup>を<sup>注</sup>始<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>余<sup>注</sup>年<sup>注</sup>君<sup>注</sup>の<sup>注</sup>女<sup>注</sup>と<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>て<sup>注</sup>云<sup>注</sup>事<sup>注</sup>あり



其の由はことごとく世に傳へたるに云ふ所の如く  
は池を親父の池とて以て其の西の面は四ノ  
四ノ方は池の所の城前の西に在りてこの  
根柢ははつふふと云ふに正しくありと  
言ふ言あり或日人れ山伏きこて後  
を徳守しける。傍よりひきかへし山上に池を  
柱大蛇ありと云ふ事あるに云ふ後妻と求  
娘の志浅く一歩にまけたりと云ふこと

ありあれは慈悲の心志川めたひたすこと  
ころに町にあり阿闍梨おきて別々の山伏と  
池の邊に寝たまふに妻赤火の玉ころ  
池に面たりとひ出うちあひてふのきあひは  
進めたりと云ふ事あり山伏の云  
まきい死しとる女赤きい今れ女ありと  
阿闍梨とて心もんとまき火にきりけ  
たすといふことありぬ山伏よりいふは後世の



守りありし池にいまやうらまへし  
さうの大蛇とあり波をけそ水底に青  
けりときまき松のいふとさうと大にわがどくし  
あまこころあり新神法刀とさうさひ海の敷と  
あま早もつとふは敷とあつてさう池の方と換  
忽ちと下さんと約さすとふ松每敷も今も焼失し  
あまこころあり池の傍に後二壇の跡と云ふあり  
長梅まらば不破拾遺此説も古松の法とさう

さうの隅に蓋浪の鏡にして歯牙と号する  
はとよひ

○七所権現社 法苑寺の跡あり

法苑寺縁起に曰珍守公の七所此権  
現ありその番迹無邪白山世代権山大  
者大宮二宮あり新基築落しとて白山  
にまこころたまふのとき老翁二人手に弓箭  
ととりて山の奥よりいふ北なる新基築落



の東意をよみ新巻よみかきしるるて  
よ山人こゝへて家ありていふ所子位  
しはひふ然思て随てあそぶものありし  
りてある國の然思にやうしてたらすら  
こゝろをいし然思野白山よ所の権現あり  
よ外よ所此社あり山代この権現威  
<sup>應</sup>志の因縁はよて時よ此意よふを勤  
しよまて七所の権現とふを宣あふかよ

ね一乙ひひうふとよこ世代よいふの正  
<sup>元本如此</sup>或の神名姓に和得よ志源社あり社  
仏寺にたれふうて事よ知て法衣の法  
とまよ古代よ大社ありし権現

○<sup>こたうしやま</sup>長山 古橋村よりあ中町より  
あり哉或れいふ事よ人よ此文字にほ  
まよ系 仲実

こゝろをいし然思野白山よ所の権現あり



為る者

この山北麓と述べて志望は遠くあり人

○ 鏡岩 己言山の麓十八町にあり

○ 己言山親音る 古樫村より二十町あり

ありしより甚しき大伽藍地ありといふ

南時の志が次が親音るのうらまはには南のふ

鶴足寺と号せる一寺ありし所のの縁記一

通あり其縁記に曰古光れ侍には是れ

南山の南ふを地の思門元本如此古仙往の

秘蔵あり志るあひには新基言落勝地と

このうらまはにはいへてとありて伽藍を建佛像

と彫刻をその後泰澄和為この山の石造

と築て入峯と臨みて新門と建立を志る

是れ之より人佛教をはつとまきまき人あり

ふふ桓武天皇に御宇傳教大師持教

の日に山に齋殿とてその尾の草廬に



總て苦修練功其こころふこころのれるに  
あつ川しよりく 湯えんありやむととほだし  
て険阻ふよちのちりまどふ寂頂のふ象とぞ  
まろふほよは佛宮のあともあつて柱礎を  
のこるなる若生たりその中におひて佛  
頭の青なるをきりきりあつて是十九面の  
容なり久しき南を越に上ははつとも眼  
目をとめて解ありほよにこぬ者あるま

多かるしとひより此老翁にあふ大師あや  
と老人こころて曰よ山は是古仙の秘蔵  
若神の取都ありこねはろく二百餘歳の  
むしつて心知盡とそを佛像とくま秋  
久しと久火災にあつて焼園とくみんは  
絶つて是法不燃とくむあり和者何そ  
かむさん今より汝に何を佛宮とくま  
群生と利益をくく大師のまを燃まはるを



そそしきく白山北白翁ありと云いまに  
さふみさひみさるとありき異人かんや当山  
の漢字さふみさひとありぬたよりて大師自  
理地は美木とありて彼佛頭と云とく妙  
跡を加振して諸相系海せり又齋地不  
よりて伽藍と建本号齋壇と安をせしむ  
あり小樹末を切しひ去石を引たせりて  
林原のあり八坊の僧舎とありて大道を

行片取謂八坊といふ尾末にありふあり  
新氣坊末谷坊岩本坊池本坊安果もふ  
ありふあり八井本坊中坊合寶坊西尾坊  
ありありこのうへに法ともは業て諸もあはく  
ひりけて伽藍としくまをのりて本寺にありて  
倉きと十一箇箇元れ同にたて落るにむありて  
馬屋と十箇箇元の間に法をたは業に法寺の  
社壇と建て十取権現とあり右のふとり



法を如法を<sup>と</sup>法<sup>く</sup>う<sup>る</sup>南<sup>不</sup>隆<sup>樓</sup>一<sup>層</sup>と<sup>層</sup>  
細<sup>く</sup>赤<sup>銅</sup>に<sup>法</sup>隆<sup>と</sup>法<sup>る</sup>南<sup>不</sup>隆<sup>樓</sup>一<sup>基</sup>  
と<sup>ひ</sup>く<sup>さ</sup>く<sup>新</sup>迦<sup>多</sup>寶<sup>此</sup>二<sup>佛</sup>と<sup>西</sup>を<sup>寺</sup>  
西<sup>不</sup>彩<sup>坊</sup>と<sup>つ</sup>く<sup>て</sup>西<sup>の</sup>坊<sup>と</sup>寺<sup>ま</sup>と<sup>の</sup>  
と<sup>き</sup>の<sup>坊</sup>と<sup>る</sup>巽<sup>に</sup>法<sup>字</sup>を<sup>た</sup>て<sup>て</sup>湯<sup>所</sup>云  
と<sup>る</sup>法<sup>く</sup>良<sup>隆</sup>に<sup>壇</sup>上<sup>に</sup>法<sup>隆</sup>と<sup>送</sup>て<sup>て</sup>西<sup>不</sup>隆<sup>樓</sup>  
と<sup>き</sup>と<sup>か</sup>さ<sup>く</sup>て<sup>業</sup>師<sup>之</sup>と<sup>安</sup>を<sup>寺</sup>と<sup>蓋</sup>  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺

法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺  
法<sup>隆</sup>寺<sup>石</sup>道<sup>寺</sup>法<sup>隆</sup>寺<sup>安</sup>樂<sup>寺</sup>松<sup>尾</sup>寺







南品十八所東西十一所あり至て深き処  
三平尋あり古俗云始孝天皇をこの七年に  
富士山つふしおきりし時道臣一敷に地拆て湖と  
あり其古富士山とあり今少一山出不足あり  
と以て亦地拆て余湖とある却て土少く  
残るお山別とあり之山をありとり子鳴呼  
附今の院採用に之利にの人と述はすと  
畏最よむ一富士山着はさるる邪代よりあり

又湖の土を以て富士と造るの説も富士の  
おれ大ひある湖の出十倍もあると是を以て  
を其偽と云ふ一富士山のてきなく湖の  
西より見ると富士山に似るものれどもあれ  
この山を以てはまゝなるも及ぶやとさるる山の  
北東より見ると其富士山の面影に似たりあり  
余湖はた自然に湖にして異論ありと云  
山岩の滴自凹る地は湛して湖とあり



理跡しつたに大なる湖ありてそを傍にありの  
小湖あり自餘湖と云ふも之は下流にあり  
此等も餘古とも命古とも書あるよしと云ふに  
拘て二山程と矢一つと云ふとあり湖中程船  
慢等多し船ハ喉の穴甚細く終に縋と  
通すとのほて水より外に拍と食せしむる  
○金湖浦よしのうら 金湖の水を云ふ或ハ金湖の内  
海余湖の今にありと云ふはなり

○金葉集

源朝綱

衣もはまの浦風さくくくさくさく山ハ音ありにたり

文庫集

如顯顯

はめて名もよみ今にの波もあて月より上流松尾より

反代集

中宗陽光

つし浪もは良はる程に書きてよこの入にせぬ月影

○金湖川

或は尾上川とも云水尾上村と

歴る所に碇石あり源餘湖に出波故記に金湖川



と号す源二一、餘湖に出東に流る南に  
轉し柳瀬川と合し岩崎山大岩山赤尾山  
の麓と遠く西にお南に流れ坂野山の東  
と經て西河内村坂野村の西とるそを北東  
流る河内村の東南と遠く乾に流れ種強  
津里の南とるそを尾上村と磨り湖水に入  
尾上村の南に郡あり

○柳瀬川 源越前玉池河内山より出東に

流る南に轉し橋板村柳瀬村の西と磨り  
天神山の東とる曲折して下余湖村の西に  
到り余湖川の支流と合し余湖川と名つて  
湖に入あり

○岩崎山 余湖の東にある山あり 越前國  
の目守山右近陣取しあり

○大岩山 岩崎山の南に流るける山あり 越前  
國越前國の日中川瀬産陣取しあり 岩



崎山よりハ少一高一

○中川瀬義隆墓 大岩山にあり天正十一年

四月十六日中川瀬之清志津嶽の居城を小園  
惣領急急にせむる未破を三依久同堅政將  
多り清秀防戦し法あふ瀬之政より近友に一  
にうたると志津嶽合戦終にえたり後凡  
瀬之清志津の墓あり詳に圖に志津瀬之清  
致死の事碑陰にえたり墓石をよと一丈余

家士の墓をよと人 家士の姓名詳るは傍に  
にたへり他日中川家にうて志津瀬之清

是期志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
買せ非志津 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清  
志津瀬之清 志津瀬之清 志津瀬之清



大岩山中川瀨兵衛墓記曰中  
川瀨兵衛尉源清秀撰別人也  
在茨木城數有戰功先是天正  
元年秋受信長之命誅和田伊  
賀守惟政武名冠天下矣十年  
復與秀吉擊惟任日向守光秀  
之軍大破之兵自死是死威名漸盛  
也其餘雖有軍功不遑枚舉十

一年三月秀吉使下清秀為此城  
守將押柴田氏上時北越魁將佐  
久間玄蕃允盛攻卒數萬兵圍  
此城急欲屠之攻戰聲如雷震  
響天地然清秀膂力絕人沉勇  
有大略更不屑之力戰防之故  
城中堅固也高山右近雖在側  
若與清秀不并力且不及一戰



而敗走所以敵軍乘勢競進欲  
拉之也清秀開門出戰故敵退  
奔三町餘敗軍七矣追亡逐北  
搏殺不知幾數百人清秀又被  
三創故家臣諫曰自裁清秀曰  
汝不知乎於今日之鬪縱雖授  
首於僕卒我何辱之乎曾聞雖  
為一人以滅敵為勇士敢不肯

焉家臣引過其袂清秀奮絕不  
還復追敵兵凡突入敵陣九回  
然眾寡不遇見其遂不可勝歸  
城自殺享年四十二歲次癸未  
四月二十日也舉世感彼驍勇  
也此雖為其舊跡年代遠久古  
塔頽側予今古于此始心自  
如見清秀况其功之偉哉盡記



之乎茲清秀第五世孫中川佐  
州刺史久恒歎其古塔頽側請  
予曰是歲幸及一百年遠忘何  
不改造之乎故予新建一基石  
淳屠換其古塔云

于時天和二年戊辰四月廿日

淨信寺住雄山誌之

○塔冢

大岩山の南殿嶽の東北尾尾にき

あり大岩山よりハ赤少一寺一

○殿嶽

全圃の西にありこの山はハあり

と云甚険難なる山あり甚きまなとハ此所

之上山石との山あり蛭岩尾の嶽嶽馬場育

ハ岩岩山中の小岩あり全圃勝家ハ此山の

尾にありて織田信孝及滝川一益と志と合

秀吉と云んと歎一途に此に出張り秀吉

忌に破地に出向と云ハ先陣佐久馬全著久



聖政と我中川流産我死一秀吉の進言  
石川玄如加者虎之如法正福臨帝格正則  
加藤源忠長明平野格平長泰片相如作由  
際源恒基内安法精屋如左門以上八人志  
先んて去るに帶田勢と進込寄殿も世に是を  
志津翁七本流といふ凡吾邦我國に流るる  
ありの切とを故に一善流等の名あり長竊  
に據するに秀吉の命を以て甚我而ありハ

八人あり然れども無物ハ先達言我死せしめて  
世人無物と除く七本流と云は無物なるに論  
せしんハ何之くは史大將の士卒此如を賞す  
るを志とせり秀吉進言に命し一流と入  
るるも衆にぬきんて如志城懐く士に如人  
形て去るに下り秀吉の小姓此八人に限る  
へし如安多しあまし我るハ人進言宿屋  
七右衛門山路持笠<sup>辨</sup>郷五右衛門に家我を



宿所山嶽殊はくもに水園勇切の士あり一書  
に後を入るものなき物あり我死せし  
に命あり望遠しとてせん事成と  
ありたる天あり其志六人とも同して一番  
に後を入るとして見ぬなき物殊に後きり  
鳴呼七本嶽と子と長き物なるにこれと  
ありく嶽嶽八本嶽と稱すへし其物象下  
にのちるものありハ石をひくへしとて山と

嶽嶽と子と古嶽の記に云新基伴香山の  
秀智と見て精念を建させんとする時に白  
髪の花推丈新基の前に来り曰吾我精念  
を建ることありハ守嶽嶽とありんふハは  
山の嶽ありと云て忽形を失ひ其音声山  
谷に響大者ありしかハ則老推丈の爲に  
社を建大者大嶽と号し山と嶽と云  
こりて嶽嶽嶽とあり嶽嶽のとも大者嶽



社のこと本浄住寺の縁起にそありそふ  
は説く異あり福赤にそ

○板野村 十余洲村の南にあり村あり  
不名産の故あり

○菅山寺 板野村より十八町奥の山に  
あり大善村より八丁ありあり大善板野村  
の間にあり山寺あり大善山菅山寺と号す  
古言字あり寺額五十石縁起に曰近江守

大善山菅山寺ハ人王三平七代孝徳天皇の  
御宇菅山の嶺より金色の光射るに耀  
のり一敷園に達し物候と立たまふ新使撰  
せき六一人の化爲支角の孫孫山嶺の知  
とあり分ちそむいそ池奇異の池水湛ここ  
きと瑞瑞と誦せり友童忽然とそ見  
初役に強て云け山ハ是佛法浄法の基地  
不動護持の所なり精舎と建立して改



依湯作一たむり書体お徳群長豊國に  
風多時に順し蒼生原樂あらん志る別法  
燈永く悉きる舎の曉に玉て断絶をまた  
久しく日月と星に増えまじ下初段殊結  
膽に詔し得て奉國あはれを氣斜あはぬ  
感あつて蕭寺所建立此所初を立たまは  
るに又人皇曰十六代孝徳天皇の所字明玉  
種々の奇瑞と鏡したまふ時に照檀上人初と

求て平室字八年に草創せり本寺ハ  
に孝徳天皇の御宇に非通の光に系  
後平國に流来して得て是以上人不思議  
後小御宇とほりて南山に安んずる所遠涼  
秘の寺徳思者羯磨の彫刻あり銘守ハ是  
徳師在<sup>者</sup>聖山王位現あり時に人皇五十九代  
宇多天皇の御宇寛平元年乙酉初段と  
昔慈相中具の修造をかへる伽藍堂と



ありて厚儀種橋雲に傳へて後より八五智如來  
と安んずる寺門ハ之を多しと云院と彰と  
都幸の円院を表し七ヶ坊舎と立閑  
基上人初任の寺院歴然として絶了廢工  
の印塔年を歴てお強まり傳法秘密の院  
室と威徳院と号し菅相寄宿の坊舎と  
伝寂坊とし又西坂二十余町の麓に令別  
力士の樓門を建て菅相自守の額と掲前

ハ龍頭山大其寺と稱し菅相改めて大其山  
菅山寺と号したまふ又人皇六十二代村上天  
皇御宇を歴ぬ白山院孝母理持現  
之偏天孫と勅禮し上の社子合して五所  
持現と云菅相自守の傳福自筆之書典  
八軸開次の二經自毫漢竹の模留御劔等  
書室皆は金持に細經卷ハ是人皇八十九  
代兼山院御宇を院上人万里の風俗を傳て



入唐唐人皇九十年代後宮多院の御宇建治  
元年宗範より後宮下の七子余巻の經これ  
を細む法室義の類ハ子昂ハ筆跡あり傳  
上人ハ是大藏經の密代あり故に牛と花々  
自在と傳上人遷化の後彼牛西坂の半途不  
到て其形若と化して今にあり陰明門女院  
五郡大方經と書寫して以經義に納女院ハ  
是人皇八十七代後深院の后妃あり地池

是自然の芳地池にして底陰と云ふ所故に  
弘法大師若女新王と御傳して皇早疾苦  
を救済宮徳面の功驗を顯 明池あり傳  
あや糸紋と女を御傳と當古ハ是悉也三  
代聖王の御傳變あり代々の福旨院宣其  
教を志す此之公郷相の徳新ハ計に暇あり  
以仍て粗死月と云ふの縁起傳ゆと云

○平野嘉一 梅は木本の同にあり



○平野神社

平野にあり

○新多敷

目前にあり小き倉山あり

○丹生郷

上丹生中丹生菅並田戸小東郷

見針川甲並尾羽梨以上九村と丹生郷と云

余洞庄の内あり

○中丹生村

中郷村の東にありつてある村

あり中郷より四十五六町ありありは村七八十軒をもち民家あり

○下丹生大明神社

下丹生村にあり延喜式

神名帳に所謂丹生の神社とあり

○上丹生村

下丹生村の北にあり村あり

丹生村より五六町あり民家二百軒をもちあり

○菅並村

上丹生村より小東にありつてあり

村あり一村民家八十軒あり

○洞書院

菅並村の北の山あり民家あり

六丁許あり塩釜山洞書院護国神社とあり



境内三千金所四方佛殿祖師堂方丈寮寮  
源老太庫裡室秀文庫隣接あり即末下  
之十石迹江半園此俗園所あり寺苑に曰  
當古名山老和為禪八天園如件と号を遠  
江玉者系氏此裔あり陽と苑と一境府祝  
山に青々山氏頼に皈依して一庵を智ふ  
蛇谷山洞嘉庵と号す時に<sup>西</sup>系十奈未の  
妻あり庵嘉今に<sup>西</sup>定程石系に師ふゆゑの

老梅あり土候呼々如件梅と云寓此のこ  
之歳亦陽の苑と号す丹生谷に入往下一里  
余に<sup>東</sup>々<sup>東</sup>並村あり師ありに至る白衣此  
老翁忽然とて<sup>東</sup>なり<sup>東</sup>吾山妙理捨獲  
那りと其取山古居部とて澄泉地を析て  
流出する味鹹一飯粥と炊く時に淡水を  
あふ師感して山城鹽谷と号して素紙草  
剣とて洞書院と号す長梅すに塩水山



に出るよ孫一のり次本草綱目五雜俎浪跡  
代研等に所て小塩井のあることを記せり怪  
しと云うべ

○田尾村 小系村の北にあり

○小系村 吾並村の北にあり村あり并  
二十の民家あり吾並村より一里あり

○鶴見村 田戸村の北にあたりてある村あり

○鶴見村 鶴見村にあり石室あり古伝

お傳古昔に石室に古のあり鶴見橋で継ぎ  
の縁人をあまを桂坂村の郷士と射敷  
しと云難ありと云

○汗川

○甲斐村 田戸村の東北にあたりてある村

○

○尾羽村 鶴見村の東北にあり



○ 近江國輿地志畧卷之九十一

作香部等曰 編輯

○ 坂野村 あまの 大室村の東にあり石田

三成出せの地ありと云

○ 金井系村 坂野村の東にあり

○ 藤原権社 金井系村にあり古伝相傳源

於朝公の妻を祭ると云



○昌山塚跡 同村の内が村にあり今井系

村の口より一里あり川端六所許者塚ありと云

とも今一塚發してあり古候も傳長首塚の跡人

あつて此地に取れと云後塚を去法く知かりと

○久遠倉と云ふ地もある故あるを云ふ

○藤湖庄 中河内村に大谷所尾殿十二村

丹生郷九村以上二十里村と云ふ

○席杖城 中河内村より越前虎杖村に出る

○中河内村より玉界一里半玉界より越前今  
庄村と云ふあり

○中河内村 越前玉の浦にあり村あり

より越前の玉界まで一里あり

○松尾村 中河内村の南一里十の所にあり

中河内松尾の中間六所許より板あり中河内

の南ハ板よりありと云ふあり

山間あり



○柳瀬村  
一 榎坂村の南にあり 柳瀬より榎坂  
の中より二三軒許ふ坂あり

○園所  
柳瀬村にあり 女を改むる 公儀の  
言所あり 彦根城より井原氏の頼凡箱根言所  
に唯ち 柳瀬氏の士二人 秩雪中石賜り 書致  
八人 但扶持人あり 女継承の切目 諸御大層  
御直事 柳三の家ハ 柳家老の平殿あり

○中尾山  
柳瀬村の西大谷山の北東にある

山あり 志津嶽園戦の日 某向勝家陣取の不  
なり 此所より 杉並置まて する余も なるに  
伝道あり

○榎坂山  
中尾山の南にあり 志津

嶽園戦の日 徳山より 信長を討ち 八左陣の如  
あり 某向勝家が 女を改むる 公儀の  
長按するに 先受給知ハ 尾張守某日 井原頼家  
村の人あり 十二歳に 一々 榎坂に 仕へて 後庵徒







一生の事一に述べて一む其如<sup>莫</sup>るあり 寧ろに居士  
の譽家 邦士の武人の貴重する如あり 詩文  
と教廣儒の志のまろころろにあはに勝ゆり 如漢の  
紀信と等し 紀信ハ景陽の重圍と解して高  
祖に代して死す 紀信け時の謀才と似てかき  
まらん 漢の天下と 紀一 是を我死して 暫時の  
保しんや 四百年の基と記さるあり 寧ろに紀信の  
如かり 後 此言恐らくハ 過論とせし 彼ハ死

一ハ漢の天下と 紀一 是を我死して 暫時の  
命と取し むそ 志ハ 一つあり 後を 事此  
幸不幸せ 似て 論せんや 劉邦の天下と 似る  
ハ 紀信ハ 如にして 劉邦の 幸持家ハ 身とハ  
莊に 亡し たるハ 是 田ハ 繼運れ して 後ゆり  
何れ とも あり あり 漢の 治世の 日ハ 紀 とも あり  
のり 暖に 衣 他 事 食て 誰 干 概 あり たり 云  
もの あり たり たり あり たり あり たり あり たり あり



難に堪へたるを以て其の功を賞し、  
わがちと見たるを以て大将の任にして保く等  
く意をこくへきことあり、  
なるべ

○柳原川 川幅百餘歩、  
川下にては、  
倉坂城

○倉坂城 或ハ、  
のり、  
界

界より、  
界

○大谷村 柳原村の南にあり、  
○大谷山 大谷村の西にあり、

○別所山 大谷山の南にあり、  
○津郷 津郷の地あり、

○林山 別所山の南にあり、  
○嶽岡 嶽岡の地あり、

嶽岡の地あり、



○山寺山

林吾山北西にある山あり志保

○嶽岡我の目系隈を陣の知あり

○片岡郷

今市村野必安池系文室八戸川

○並飯浦山梨中郷下余湖哲口以上十二村と云

○余湖名の因あり

○今市村

大谷村の南にあり村あり

○狐塚

今市村と大谷村の中間にあり山

志保嶽岡我の目系下北新橋家人数と押致す

必あり

○東郷村

今市村の南にあり村あり

○古城址

東郷村民家の東山山にあり志

保嶽岡我の目系久を原系政陣城のありあり

とあり

○小安村

今市村の西にあり村あり

柳瀬川の南にあり村あり

○三井村

小安村の南にあり三井社あり



の石あり

○片屋大石

と赤松村天徳山の麓あり

○池多村

小安村の西にある村あり

○池多山

池多村の西にある山あり志摩嶽

園我の日法見野島と土陣の地あり

○中谷山

池多山の南にある山あり志保

嶽園我の日前田又た山と土陣の地あり

○新市町

中谷池多山の西にある山あり志保

しるふ志保嶽に於き此山あり志保嶽あり

志保嶽あり志保嶽あり志保嶽あり志保嶽あり

字に依る志保嶽園我の日依久呂志保嶽云々あり

○文室村

小安村の西にある村あり

○文室山

文室村の西にある山あり

○堂山

文室村の南にある山にして大板山あり

少一嶽一堂山と志保嶽に依る志保嶽あり

志保嶽園我の日峰次郎と志保村



軍人陣所知り

○八戸村

文字村の西南にある村あり

小西の隅にある村あり

○川並村

餘湖の西北端にある村あり

○天沼神社

川並村にある

菅五相の墓あり 非記あり 縁起と号を記し

曰昔斯郷の酋長と名はけて相畑を又と云

雅礪にりて尋常此入に云あり 一日を記へ

殆半と云 江水に於日西に傾き帰らんと

欲して多と柳下にはかく空中にああつと云て

樹歌にかありと云てありてこれと云ふ

異香と云ふと云ふ 軽羅の羽衣あり懐にりて

羽衣と云ふと云ふと云ふ 一人ありこれと云ふ

秩と云ふと云ふ 曰公の今懐にりてこれと云ふ

あり羽衣あり予は湖水の清きを以て毎年

一ふふのほふ体と云ふ羽衣ありと云ふ 天に降る







の念僧養山寺の言寂坊所周梨多え知為  
其をまゝの家に今檀度と文時に知息を  
て誠知當に之てそのむつまきと曰誠の正し  
之口をさして言え均を童子思ひあて曰く寺  
に入てあまふ性智敏聰にして八年にひと  
林門の言致聞て歌に曰言よるせさハなるを乳  
やふひー小端やふひー如やふひーきを後著る系  
是書公余湖の湖多にあそふ歌に曰余湖のうこ

元平知此

其後を承けんと女子あまの羽衣がしげんやハ  
相畑の家に宿るして次に養嶺にやそ池水  
を身之に蒙致いふ言一是に於て彼少童と見  
て至成體を知て別有て巻子とるを年十  
歳此時始て而言の待を依て曰月耀如  
晴雪梅花似照足可憐金鏡轉  
庭上玉芳馨養山寺ハ新山  
其寺と云養の女將知雄の時教この寺に



あつてその懇願の志淡くはなれに奏望を経て  
四十九坊と建立してお氏の名と賜改め  
大善山管山寺と号する者あり自給の額  
れきく法華経自管の像軸と作て承く  
此山に陰庇して寺門の繁華とほりありし  
まに長按するに以上は縁記の設虚偽の事さ  
瑞を記したるは就れとも其まてま一きの糸  
世先ハあるてん雅和集には事あり皆述に

必余圃のうまに減如めちるそ水あけられたるこ  
ありたる男江あひて脱をけさるをそりたり  
若れたなる<sup>注</sup>けり<sup>元</sup>て<sup>下</sup>其男の妻に  
ありて居候ひけり子ともうみて<sup>元</sup>こ<sup>下</sup>にありに  
けれ<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>と<sup>元</sup>の<sup>下</sup>おん志先<sup>元</sup>作<sup>下</sup>て<sup>元</sup>た<sup>下</sup>ハ<sup>元</sup>福<sup>下</sup>と<sup>元</sup>の<sup>下</sup>  
あまけ<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>は<sup>元</sup>男<sup>下</sup>の<sup>元</sup>屋<sup>下</sup>ま<sup>元</sup>う<sup>下</sup>い<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>る<sup>元</sup>お<sup>下</sup>波<sup>元</sup>子<sup>下</sup>父<sup>元</sup>の<sup>下</sup>か<sup>元</sup>く<sup>下</sup>  
たる<sup>元</sup>天<sup>下</sup>衣<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>う<sup>元</sup>て<sup>下</sup>ま<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>う<sup>元</sup>け<sup>下</sup>れ<sup>元</sup>ハ<sup>下</sup>女<sup>元</sup>候<sup>下</sup>ひ<sup>元</sup>し<sup>下</sup>を<sup>元</sup>世<sup>下</sup>と<sup>元</sup>思<sup>下</sup>て  
花<sup>元</sup>より<sup>下</sup>ける<sup>元</sup>波<sup>下</sup>子<sup>元</sup>に<sup>下</sup>ち<sup>元</sup>き<sup>下</sup>う<sup>元</sup>け<sup>下</sup>る<sup>元</sup>ま<sup>下</sup>ハ<sup>元</sup>教<sup>下</sup>ハ<sup>元</sup>か<sup>下</sup>る<sup>元</sup>身<sup>下</sup>あり



あはれおほくけをそあまし七月七日にたれなり  
はうの氷法活きし一まの日にあはれあまし  
とそ別れの泪とぬるしけしきき別れし初  
子と書ふおれらふしふとふたふた和集し  
とる伝をすき書ふあはれ余長の開きつるけし  
と女子のその羽衣をけしんやいとぬせしと破事  
とぬせるよりぬにぬしつにぬせしとあまのぬ  
用しかき下しきし書ふおはらうりぬたまふ

いひ或は如式詳るれをいひ伝説よりかゝる相  
知をよりしを設しるまてと如して天にふ世界  
あつて男女をとりしむるふりたれらるる虚  
言よりしをとりしむるふりたれらるる疑  
子細もありと女天人ありしむるふりたれらるる  
らひとあましをとりしむるふりたれらるる  
より義実の相知をよりしむるふりたれらるる  
あまのまを執程の娘怪にたふらなれらるる

女



歟や一書丞相ハともう降参る人にもうん書系  
系と考に書系ハ天徳日命より出命十  
二世の孫可美乾飯根命の裔野見宿禰土師  
の姓となす天徳元年光仁天皇土師の姓を  
て書系の姓を初てそれより数代相續して流  
れ位下文章博士是書に到る是書伴氏と書  
て書丞相と生丞相講ハ道真字六之是書  
の四男<sup>男</sup>より初名ハ所見と云母ハお伊氏より

書系初光傳ハ是書の一男とて書系日死  
書系源秘地書系官位并進孫書系授記  
書系文章等の諸記相相をまう授く  
と傳きりと云授くハ兼和十二年乙丑に  
生るは久とて書系を原傳と云書にハ  
書系の子是書の子南庭梅樹の下に生  
まり是書書く子とて記せり不詳の記用  
一ハ河内不書生天徳の縁記に知子天



より傳ふり其臺を築て都に之を是に名  
て子と名を若玉相を多うある若玉の文を  
多しと名を一破地に若玉あり若玉あり  
若山寺あり是を筑し若山出けの地とせらば  
若玉迷路あり古昔破道若山あり口飲を  
志すに天女羽衣の事は此の事なり  
此にいはる事多あり 隆河ふと保松系め女  
の事 猿乐若流の羽衣といふ 猿曲に傳り人

勝美母後正比治山の頂の井にて女あり  
羽衣を脱法せし處に羽衣と名をよみ又  
依り山大狼を交て女は水に落せられ  
羽衣をとりかくし天女と名をよみ  
隆流と名をよみ云々によりて  
いなりあやこに伝ふ事西玉にかりの羽衣ありと  
見えて披羽衣記に猿楽新喻の女は名  
とりかえなりと書とせし 猿楽興記に伝は



とを戦して記さると相相を交り、とを曰く和漢  
の日の書<sup>その</sup>行るり、呼呼也海の一と地なること  
て天上に世界ありて天女も多きお音のこ  
中らんとたのむるけしむるあり

○<sup>ちゅうりゅう</sup>多由志

川並村にあり、金剛の西端なり

○白木大石神社

白木森の中にあり、系

系系を爲すに、と新羅大石神をなり、新羅  
の文字志良木と訓れ、白木の文字志良木と

訓を訓の曰く、と以て今も、白木と云ふ

○大板山

川並村八戸村等の西にあり、少

文室山に、法名の山あり、昔木山なり、ハ少

字一志、付、藤岡、我の曰、大滝、爲、八、山、新、羅、在

陣<sup>陣</sup>の山あり

○<sup>たうみ</sup>芝海山

川並村の西にあり、<sup>坂</sup>坂、<sup>海</sup>海

坂と云ふ、坂あり、淡井那の境なり、項上に

土林あり、巖已、後、改、の、石、像、なり、在、に、柱、地、坂、なり



いなり古伝云井<sup>牛元</sup>有る病ありけり此石像にいのり  
と云必ありしあり

○<sup>牛元</sup>佛岳 皇海山の麓なり相傳古昔正法寺

と号する寺ありけりしなり

○正源寺 川並村の山陞<sup>牛元</sup>にあり經宗佛

宮山正源寺と号す則有皇洞末院の遺蹟

新なりしに法師如來の像と云云

正法寺の佛ありと云

○<sup>牛元</sup>佐藤村 琵琶湖の小極北岸にあり村

あり賤振の南に蘇振と號て北村あり<sup>北</sup>此

より京都に朽むく商人此地より多く船に

のり而湖上島紅の津あり金村の中餘あり

と俗に傳志賀郡中西教寺純古の院例

として毎歲正月三日寺門にのみあり合を

と云今飽しむべきと食責と云慈惠信正これ

を禁せんと歎し旅宿と有りけり寺門に入



例のこゝに食費とてなを強僧自若と一しつゝ  
能とあり寺僧皆強く慈悲愛をめぐりてか  
こ水より食費と止るとふ慈悲愛食こころ  
旅と悉く湖に入を流止る地と飯の海と云と  
いなり甚候用一かくき説なり慈悲愛を  
こころかゝる教下の知術いさましくは  
別には子細あるなま一

○<sup>圓</sup>福寺 飯浦村にあり源宗始長福寺

と号す述より無相衆の浄名と遊て円福寺  
と云ふ

○山形村 飯浦村の南にある村なり

○中郷村 赤野村の南あり新村より西

述より述あり川並村より飯海村と越て

塩原へ出るとあり中郷村の南より谷川あり

甚程に路あり丹生の谷路より洞寺院路より

山谷路より許新て洞元あり洞の中流して



とく 難一 与乞の 洞と云 嚴早 申す とき 六 出 氏  
糸 戒 沐 活 一 一 洞 の 中 に 入 必 留 必 留 必 留

○ 山 主 社

中 所 村 に あり 必 留 日 去 大 比 叡

の 申 書 運

式 申 名 帳 に 取 留 経 緯 日 去 の 申

社 是 多 久 一

多 久 毎 日 七 月 廿 四 日 共 取 相 撲 證

あり



明治二年二月十日 梅了

安永保堂 三



